
少年と空 - EAGLE KNIGHT -

マーベリック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年と空 - EAGLE KNIGHT -

【Nコード】

N5181J

【作者名】

マーベリック

【あらすじ】

大人のエゴで始まった戦争に子供たちはその身を投じ戦っていた。エースパイロットに憧れる少年兵、風宮翔かざみやしょうは海軍でパイロットとして戦う。彼は、空で戦う。敵とそして自分の理想と。これは一人の少年の小さな戦記である。

MISSION 0 プロローグ（前書き）

諸事情で長く編集できず本当にすみません。

そしてこの度、しょね空はリニューアルいたす！！

活目せよ！！少年たちが飛んだ空を！！

MISSION 0 プロローグ

灼熱の第二次世界大戦が終わった世界に今度は極寒の冬が訪れた。
「冷戦」と呼ばれる冬が。

溶けては固まり、溶けては固まる氷はある時、完全に溶けた。

1983年 尖閣諸島沖にてプロトニウム発見

莫大な量の石油が埋蔵されている推測されていた尖閣諸島は社会主義国家の中国と資本主義国家の日本が領有権を巡って小競り合いをしていたが、この「プロトニウム」が発見されたせいで小競り合いは武力衝突へとエスカレートした。

プロトニウムの特徴は持続的かつ強大なエネルギーを発生させることと圧力をかけると個体、液体、そして気体に還元できることだ。

しかもこのプロトニウムは地下に2000兆トンも埋蔵されている。この島を取った者が冷戦を制す。と言っても過言ではない。

1992年 中国、北朝鮮、ソビエト連邦に加盟。

1993年 ソ連 国連を脱退

国連から脱退したソ連。 これは世界の安全保障のシステムの崩壊を意味した。

その事に脅威を感じたアメリカ大統領のJ・ブッシュはニューヨークに西側の首脳を極秘に集め、ある「会議」を行った。

1995年

アメリカ、NATOを解体。後に西部資本主義連合（Western Capitalism Union）を設立。

この組織にはアメリカをはじめとする資本主義国家が加盟している。

これで世界は完全に二つの国、二つの思想に分かれたのであった。

武力が抑止力となる平和は、ちょっとした衝撃で崩れる積み木の城のように脆弱なものであることは歴史が証明していた。

1999年 ソ連、西部連合に宣戦布告

ソ連には理由があつた。朝鮮半島にある38度線付近で遊んでいた少女を国境の警備兵が射殺したからだ。

この事件によりソ連の国民感情は爆発。ソ連の代表、ブレジネフ書記長は怒る国民を抑えれず取った選択であつた。

世界中の軍力が衝突する戦争。これは歴史が始まってから三度繰り返された。しかし今回は勝手が違う。「核兵器」があるからだ。

両国は核を使わなかった。核を使えばどうなるかくらい分かつている。

しかし血は流れる。多すぎるくらいに。

そして国は、未来を担う少年や少女に銃を持たせ殺し合わせるようになっていく。

MISSION 1 始まりの風（前書き）

たびたび、すみません。また再々リニューアルしました。

前回のやつ、自分に合っていないと思ったので書き直しましたwww
遅すぎwwwとか言わないで下さい。

では、本編始まります

MISSION 1 始まりの風

2015年 4月12日 午後8時30分

太平洋 第7太平洋機動艦隊 J・グラフトン 居住区

太平洋を東へ、東へと突き進む船団、太平洋第7艦隊の旗艦、J・グラフトンの居住区の通路を全身黒ずくめの服に銀行強盗を彷彿させる黒いマスクを被った二人の見るからに怪しい男達が二人、体勢を低くして歩みを重ねていた。

「二等兵、任務の概要を報告せよ」

「はっ軍曹。資本主義の犬共の機密を撮影。偉大なる將軍様にそれを献上することあります」

二等兵と呼ばれる屈強そうな体躯を持つ長身の男は軍曹に任務の概要を述べた。

「よろしい。ならば急いで任務に取り掛かるぞ」

ふふふ、と低い声で笑い声を軍曹は漏らす。

「サー！！敵兵であります」

T字路越しにパトロールをしている巡回兵の姿を見つけた二人は手近な部屋に飛び入った。

隠れた部屋には無機質なロッカーとその先に、薄いガラス戸がある。

そして、石鹸のほっじゅんな香りと水の音が溢れる空間であった。

「どうやらここようだ」

軍曹は確信の笑みをマスクの下で見せる。だが、二等兵は訝しい様子で軍曹を見て、そして問うた。

「ここに在るのですか例の『軍事機密』が？」

「その通りだ二等兵。あれを準備しろ」

「はっ。ここに」

そう言った二等兵の手にはCANONのデジカメが用意されている。

軍曹は熟練されたフットワークでガラスに接近。扉をゆっくり慎重に開く。その幅は約一センチ。作業を終えた軍曹は二等兵に『来いとジェスチャーを出した。

その指示通りに二等兵は中腰姿勢ですばやく移動。軍曹の背後に回り込み、彼の作った隙間の向こう側に存在する『撮影目標』を一心不乱に取りまくる。

重要な作戦が故に緊張のために浅くなった呼吸で手元が揺れる。だが、歯を食いしばり手ブレを抑えた。この任務はいかに正確に写真を撮影するかで成否が左右されてしまう。ミスの許されない危険な任務である。

「……もう、無理です。はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……

……がはっ」

荒い呼吸が無くなったと思われた刹那、どさりと鈍い音が軍曹の背後でした。

「ん？」

音につられた軍曹は背後を一瞥した。だが、後方では惨劇が起きていた。

「に、二等兵！？」

驚きを隠せずに軍曹は小さく叫ぶ。なぜなら、後方で二等兵が仰向けに倒れていたのだから。さっきまで健康体で銃撃も予測されないこの場所で。

すかさずに軍曹はその顔にしてあるマスクを外し、二等兵の元へ駆けつけた。

そのマスクで隠された素顔はまだ、年端行かない東洋系の少年だった。

駆けつけた軍曹は、二等兵のマスクを外してやった。二等兵の正体もまた少年だった。あどけなさの残る欧州系の少年だ。

「すみません、軍曹。もう自分はだめです」

最後の力を振りしぼってカメラを軍曹に二等兵は手渡そうとした。その手はプルプルと振るえ、そしてその顔、鼻の辺りから出血が見られる。

「自分の屍を超えてください……軍曹」

普通の指揮官ならここで彼を見捨てる。しかし、彼は違った。

「行くぞ二等兵。閣下の下へ」

軍曹はそう言って、二等兵のカメラを持つ手を取り自分の肩を貸した。

「す……すみません。軍曹」

二等兵は涙を瞳に浮かべ、軍曹に感謝の意を伝えた。

「気にするな行くぞ」

二等兵を軍曹抱えながら軍曹は踵を返す。その場から撤収し彼を治療するため、撮った機密を『閣下』に献上するため。

ガラガラ

背後の扉の開放音。人の気配。その両者が軍曹に背後を確認させた。

「げっ！！光！！」

一瞬、軍曹は言葉を呑んだ。彼の視界には、ショートヘアで体にバスタオルを纏った可憐な少女がいた。

しかし、彼女のタオルの下にあるはずの胸は平らたく、関東平野を彷彿させた。

「何してんの？翔」

彼女の発した第一声は棘も嫌悪感も無くただ普通に訊いたような口調だった。そして両者を不気味な沈黙が包む。

その沈黙の中、少女は今の状況に気づく。

女子シャワー室+男Ⅱ覗き魔

という事を。そして、地味に逃げようとした軍曹を見た彼女は、噴火寸前の火山のような形相と、握りこぶしを突き出して言った。

「このお……変態がああああ
ああああああああああああああ

あああああああああ！！」

「あべら!!」

大氣を切り裂くストレートパンチがまっすぐと、軍曹こと翔と呼ばれる少年に飛翔する。着弾。そして二等兵を巻き込み彼は５メートルほど低くスピンの効いた弾道で吹っ飛んだ。まさに、場外ホームランと言わんばかりに彼らは吹っ飛んだ。

沈黙の空母＜完＞

そして、始まるのであった。本編が。

一時間後……

「翔！！フランク！！てめえら何回目だ！？女子シャワー室覗いたの！？」

一条明大尉^{いちじょうめいだい}は、軍曹と二等兵に怒鳴りつけた。

ここは、空母「J・グラフトン」所属の航空隊、第184航空隊ヘルハウন্ズの待機室である。

そして、今お叱りを受けている二人の少年の一人、『軍曹』こと風宮翔少尉^{みやしょう}は指を折って回数を数えている。その相手の『二等兵』、フランク・ウィルディ少尉はその姿を見てため息をついていた。

この二人は、このヘルハウন্ズ所属のイーグル小隊でパイロットの任を担っている16歳の少年兵である。

「……6、7、8、9、10……わかりました！！32回です！！」

「一回殴るぞ。グーで」

「すみません」

ぺこりと頭を翔は下げた。あまり反省した様子を見せずに。

「もう良い。お前ら、公用トイレ掃除3ヶ月の刑だ」

「そんなあ、自分たちは……」

翔は抗議をしようとしたが、隊長はそれを遮る。

「本当は3ヶ月飛行停止にしてやろうと思ったんだぞ。だがな、今の戦況で飛べる奴を飛行停止にできるほど今の戦況は甘くないんだ。ホントはお前ら軍法会議モンなんだからなありがたく思えよ」

「はい」

「イエス・サー」

不満の色を残して、二人はその指令を受諾。それを確認した明は『解散』の一言を出した。

「失礼しました」

二人はそう言い残し、敬礼。そのまま待機室を出ようとしたが明は呼び止め、言った。

「カメラは没収な」

「なぜですか!？」

そう言われた途端、さっきまで平静を保っていた、フランクは血相を変え抗議する。

「盗撮写真の入ったカメラなんて没収意外どうすんだよ。そもそも、お前達はこの俺、將軍の為にやったことだろ……あ……」

自分の失言に気づいた隊長は、口を押さえて隠蔽しようとした。

將軍……それは、ソーシャルネットワークサイト『MAXI』にある、この空母のサークル内で『女の子の写真 買います』で有名なS級の変態である。そして、この二人は彼のため、自分の為にこの無謀な任務を敢行したのであった。

「こほん、と言う訳だ。早く渡せ。これは、上官命令だ」

上官の命令が絶対の軍隊でこの言葉は上の者にとっては最強の武器であり、下の者にとっては最凶の脅迫である。

「はい。了解です」

翔はポケットから潔くカメラを出して、彼に差し出した。

「翔!!」

フランクは彼の名を呼び、制止させようとしたがカメラは隊長の手に渡ってしまった。

「失礼します」

翔は踵を返し、その場を去った。その背を追うようにフランクも敬礼し去る。

待機室から出た翔とフランク。フランクは不満そうな表情で翔に言った。

「何で渡しちまったんだ？」

その声とともに鉄面皮を保っていた翔は破顔一笑する。

「どうしたんだ？」

突然笑い出した翔にフランクは訝しい表情を見せた。

「見るよ。これ」

手のひらには一枚のメモリーカード。

「翔、お前まさか……」

「ああ。すり替えたさ。今頃、隊長は……」

ふふふ、と翔が笑みを笑いをこぼしたのと同じく、待機室のあたりであろつ。叫び声が廊下に響く。

「何じゃこりゃあああああああつあああああああああ
あああ」

場所は変わって待機室。

明は隊の備品のノートパソコンで、収穫の品を確認しようとして、メモリーを開封した。しかし、そこには桃源郷には程遠い地獄のような景色。男子シャワー室の屈強な筋肉ダルマ達のシャワー姿が液晶画面に映し出されていた。

彼の上げた悲鳴を背にほくそ笑む変態二人。そして、二人のテンションは最高潮に達し踊るような足取りで廊下を歩き出した。

「天国が俺達を待つてるぜええええええええええ」

「天国って何？」

凜とした声が背後からした。その、声の持ち主はショートヘアの小柄な少女、吉田光^{よしだひかり}少尉だった。

彼女はこの空母の救難ヘリ部隊の『レスキューエンジェルス』に所属の看護兵である。年齢は16で翔と同年で、同じ訓練校の出身だ。ちなみに、16歳というのは西部連合軍における志願兵の最低年齢であり、18歳からが徴兵年齢である。

「あ、ひ……光」

翔は突然の彼女の登場に怖気ついた。その一方、フランクは何の事だが分からず、きよんとしている。

「ねえ、天国って何？」

「俺が、教えよう」

フランクが一步前に踏み出し言った。翔は彼がきつと上手くやり過ぎたのであろうと思った。そして期待の第一声は。

「この、メモリーカードに入っている。可愛い娘ちゃん達のシャワー姿の写真を見てウハウハする事だ。どうだお前も、一緒に……」

その続きは誰も聞けなかった。彼女の華麗なドロップキックがフランクを強襲。彼はパイロットらしく後方へ3メートルは吹っ飛んだ。

「どういうことかなあ？説明してくれる？」

ドロップキックの着地のせいで崩れた態勢を立て直した光は笑顔だった。どこか、人を殺しそうな。

「あ……これは、その……はい……ごめんなさい」

頭を下げ、光に翔はメモリーカードを差し出した。そして、そのカードを光は受け取った。

「翔」

「はい」

顔を上げた翔に光は満面の笑みを浮かべた。

「この、馬鹿ちゃんがああああああ」

その瞬間、翔もまた空を舞う。フランクより高く、遠くへ。

どき、と音を立て落着いた翔は光に一言。

「なんで……こんなことを……」

光は翔に言った。

「この、ラブリーチャーミーなあたしの体を見れたのよ。命があるだけ神様に感謝しなさいよ」

「けっ。なにがラブリーチャーミーだ。ノーオッパイの間違いだろ」

と吐き捨てた翔に光はギロリとにらんで言う。

「何？今度は海に落とされたいの？」

「いえ、何でもありません！！美人端麗、才色兼備の吉田光様！！」

「よろしい。それと二度としないって誓う？」

「はい！！」

福島名物の赤べこが如く首を縦に振り首肯する翔に光はさらに問う。

「ホント？」

「もちろんです！！」

「なら、お詫びとして、売店でアイス」

「はひ？」

突然の事に翔は困惑を隠せなかった。

「お詫びにおごれっての。嫌って言うなら、皆にばらすわよ。盗撮した事」

どうやら、この事件を知るのは隊長と光だけのようだった。

脅迫にも似たおねだり。翔には選択の余地がなかった。

「はい」

「よろしい」

そう言つて光は倒れている翔に手を差し伸べた。

しかし、そんな平穏な空気も戦争は壊す。

けたたましいサイレンが廊下に響き渡る。そしてスピーカーからはアナウンスが流れた。

『敵航空団が本艦に接近。総員、第一種戦闘配備。ヘルハウズは緊急発進せよ。繰り返す……』

敵の来襲。光はさつきとは裏腹に不安げな表情で翔に話しかける。

「敵襲だよね」

「ああ。俺達行かないといけないな。アイスは帰ったらな。おい！
！フランク」

倒れているフランクを翔はつま先で突つついた。

「スクランブルだ」

「あいよ」

フランクはそう言って、素早く立ち上がって翔と共にロッカールームへ走り去ろうとしたが、光が口を開く。

「二人とも！！」

「どうした？」

翔とフランクは振り向いた。そして、彼女は二人に言った。

「絶対に帰ってきなさい」

「わーってるって」

笑顔で翔は答えた。

そして、走り出す。

死地、戦場とも呼ばれる空へ少年や少女達は向かう。名誉の為、家族の為、愛する者の為に。

MISSION 2 火竜の翼 (前書き)

便利?な用語解説付になりました。

もし良かったら使ってください。

なお、分からない部分がある場合はググってください

MISSION 2 火竜の翼

同日 午後9時45分 空母J・グラフトン 飛行甲板

世界で一番危険な場所。それは、空母の飛行甲板だろう。

人の断末魔をも消すエンジンの咆哮。カタバルト 射出機で高速で撃ち出され、猫の額ほども無い甲板に着艦をする艦載機。

そして、甲板はいつにもまして慌しかった。最新鋭の戦闘機、F-28ワイバーンが迫り来る敵機を迎撃すべく緊急発進を行おうとしているからだ。スクランブル

赤いウェアを着た甲板作業員達は、空対空の武装をF-28に搭載させていた。そして、その慌しい甲板を翔は駆け足で自分の愛機、複座型のF-28Bの216号機へ向かっていた。

複座機とは、パイロットとその補助を行うRIO、いわゆる策敵士が搭乗する機体のことである。基本、少年兵はこの複座機に乗る。理由は、パイロットに操縦に集中させるためである。

十代の子供に難解なレーダー操作と機体操作を同時に行え。と言うのは困難。いや、不可能だ。

故に作業を分担し、負担を削減させる事が一番望ましい。

「ごめん！！遅れた」

翔は愛機の後部座席に座る少年、みやじまりゅうや 宮島竜也少尉に一言わびた。

「急げよ。敵さんすぐ近くまで来てるらしいからな」

そう竜也は返す。翔は足早に機体に付けられた搭乗用の梯子ラダーを駆け上がり、コックピットに滑り込む様に入った。

「那琥、機体の状況は？」

翔は愛機の整備を担当している、弥生やよいなこ那琥准尉に近接無線で問う。

『エンジン出力も問題なし。フラップ、エルロンとも油圧は正常。ローレンスはいつも通り最高よ』

「そのローレンスってやめろよ！！気持ちわりいな」

ローレンスとは、那琥が翔の216号機に勝手に付けた名前である。

『良いじゃない。早くエンジン点火して』

彼女は人差指を立てた。これは第一エンジン、右エンジンの始動を指示するためのサインだ。

あらゆる音がエンジン音にかき消される飛行甲板上では、このようなハンドシグナルが音に変わるコミュニケーション手段となる。

「了解」

翔は慣れた手付でエンジンを点火。刹那、機内に車のエンジンスタートに似た振動が走った。

回り始めたエンジンのエアインテイク。甲高くなるジェットエンジンの咆哮。

翔はエンジンの回転数が均等になった事を確認して那琥に告げた。

「チョークを外せ」

翔は、ギア、いわゆるタイヤに敷かれているドアストッパーに似たチョークと呼ばれる止め具を外すよう指示を出す。

レーンボーチーム
作業員たちがそれらを外し終わると、次は赤い誘導灯を持った誘導員が翔の機体の前に現れた。

黄色いウェアを着た、彼らは機体を射出機カタバルトへと誘導する事が仕事のカタバルトオフィサーと呼ばれる兵員だ。

「イーグル3よりデビルへ、発艦を許可されたし」

『デビル了解。第三カタバルトに行きなさい。とういか、急行しろ』

と、少女というより幼女の声が翔に指令を出した。オペレーターの北条神海ほつじこうみ少尉だ。ちなみに、デビルとはこの空母の管制名である。

『復唱は？イーグル3』

「了解。あと……俺に指図できるのは、Bカップからだ」

『なっ！！おぼえてなさいよ！！このバカ』

翔は無線を切り、そのまま、誘導灯の明かりに従い左舷、第三カタ

パルトへ機を微速前進させた。

そんなこんなをしている内に、カタパルト誘導員は停止のサインを出した。機のギア、いわゆるタイヤの先にあるランチバーと呼ばれる金属製の棒とカタパルトとの連結作業をするためだ。

動く機体と小さなシャフトを連結させるのは非常に難易度が高く、故にこの場面は彼ら、レインボーチームが最も精神をすり減らす場面の一つである。

ガチャリ、と低い連結音がした。その次には、機体の背後にJBDジェット・ブラスト・ディフレクターと呼ばれる防熱版が平らだった甲板からそり立つ。

これは、ジェットブラストと呼ばれる排気の際に発生する熱風及び、暴風から作業員を防護するための装置である。

翔は最終点検で、エルロン、フラップ、垂直尾翼ラダー、水平尾翼エレベーターを動かす。

「油圧良好。というか、最高だな」

そう言つて、翔はスラストレバーを前に押し機体のエンジンの回転数を上げる。

耳がおかしくなりそうな轟音が響き渡る。

アフターバーナーの業炎がエンジンノズルから燃え上がる。

ドクンドクンと翔の鼓動は早鐘のごとく波打つ。

高鳴るエンジン音。

空の男は危険だが楽しい大空に翼がいざなってくれることを待ち焦がれる。

離陸を待つ翼。翼が羽ばたくのを待つパイロット。

これほどじれったくも楽しい瞬間を味わえるのはここだけだ。

カタパルト士官が船首の誰もいない虚空に剣を刺すようなサイン。カタパルト始動サインをした。

一瞬にも近い時間だった。銀翼の火竜が風を切り、空高く舞ったのは。

同日 午後9時45分 太平洋

高度6000メートルの星が瞬く暗い空を、銀翼は切り裂き翔けていた。

F-28ワイバーンの作り出す統制の取れたV字の大編隊は、渡り鳥の大移動のようだった。

しかし、鳥達との大きな違いが一つある。それは、鳥は暖かい安住の場所を目指して飛ぶ。しかし彼等は死地へ向かっているのだ、戦場と呼ばれる。

『デビルより各機へ、敵は本艦から南東へ200キロの所を飛行し

ている。数は11。迎撃に移れ』

デジタル暗号化されている神海の無線が戦闘機の二個大隊に告げた。編隊は波状迎撃で、第一陣はヘルハウন্ズのイーグル小队。そのカバ―を他のフォックス、ハーピー―が行う。

『イーグル1了解。これより、迎撃を開始する』

一度明は広範囲用の無線を切り、編隊用の無線で後続の編隊に告げた。

『イーグル1より各機へ、安全装置を解除。全機、アウトレンジ長距離ミサイルを用意しろ』

その指令を待っていたと言わんばかりに翔は安全装置を解除。そして操縦桿にある、武装選択ボタンを操作。AIM-125クラビ―長距離ミサイルを選択した。

ヘッドアップディスプレイ翔のHUDには、敵機を補足した際に現れるシンボルが浮かび上がる。

『攻撃開始』

一条隊長の掛け声と共にヘルハウন্ズの編隊は目標へミサイルを一齐発射した。

雲の尾を引き、ミサイルは目標へ我先に飛翔。ミサイルの何発かは、虚空へと飛び去ったが何発かは直撃。爆散した。

『イーグル1より各機へ。散会して迎撃を始めるぞ』

一条隊長の掛け声と共に銀翼の竜はその翼を優雅に翻し、散会した。

そして、始まる。音速の空中戦^{ドッグファイト}が。

MISSION 2 火竜の翼（後書き）

<空母>

航空機を海上で運用するための船舶。翔達の所属するJ・グラフトンはニミッツ級と呼ばれる300メートル級の空母で、その火力（航空機による）は一隻で第二次世界大戦のアメリカ海軍の火力を越しているらしい。

<第184航空隊>

ヘルハウズ航空隊、翔の所属する戦闘機部隊。12機のF-28戦闘機を所持し、イーグル、ハーपीー、フォックスの4機編成の小隊で構成されている。

<HUD>

Head Up Displayの略称。ヘッドアップディスプレイとは、簡単に言うなら照準器と基本的な計器が合体した装置。

パイロットの目線上にあり、高度、速度、水平状況、迎え角（機体の上下の傾き具合）そして、照準器をまとめた、近代戦闘機にとっての必需品。

<AAM>

空対空ミサイルの事。

エルロン

飛行機を横転やロールさせるのに使う動翼です。

フラップ

高揚力装置とも呼ばれ、飛ぶ時に必要な力、『揚力』を高める際に使う動翼の事。離陸時や着陸時に翼の一部が下を向いている。これがフラップです。

垂直尾翼^{ラダー}

機体の二次元的な左右の動きを司る部品です。飛行機の後ろに垂直に立っているあれです。

水平尾翼^{エレベーター}

機体の上下の動きを行う部品です。

MISSION 3 問題児のドッグファイト（前書き）

空戦機動の説明は見ないと分からないものですから、Wikiのアニメーションを参考にしてください。

マーベリックより

みんな、集まって！！しよねそらが始まるよ！！

MISSION 3 問題児のドッグファイト

音速に限りなく近い速度で翔は敵の編隊に突っ込んでいく。その姿はまるで闘牛のようだった。

『イーグル3出過ぎるな!!』

隊長の命令も聞かず、アフターバーナーの陽炎を^{かげろう}たぎらせ、翔は目の前の敵に猛進する。

ビィィと、甲高いピープ音がコックピットに響く。ロックオンアラートだ。相手が自機を捕捉。ミサイルを放とうとしている警告。

「ロックされたぞ!!」

竜也は慌てた様子で翔に警告する。しかし、翔は臆すことも無く加速を止めない。

そして、ミサイルは放たれた。

火の尾を引く、死の妖精が火竜へと飛翔する。

マッハ4で飛ぶ殺意の塊。それがミサイルだ。

翔は操縦桿を引くのと同時にそれを左に倒した。

そして、彼は始めた。^{バレルロール}螺旋旋回を。

バレルロール、それは横倒しの樽の内壁をなぞるように螺旋を描き^{バレル}

ながら飛行する空戦機動だ。マニユーバ

最初の上昇に追いつけなかったミサイル達は、為す術も無く漆黒の空へと消えていった。

翔はバレルロールが終わると、敵機のシルエットが見えるほどの距離にまで接近することが出来た。

暗視ゴーグルに移る敵機のシルエットは、流れるような美しいボディを持つSu27スホーイフ兰卡ーだ。

この機体はF-28にも引けを取らない機動性を持つ第4世代の戦闘機で、アメリカのF-15イーグルと双璧を成す最高の戦闘機と呼ばれている。

『イーグル3、エネミータリホー敵機視認。攻撃を開始する！！』

翔は自分の後方に去った敵機を追うべく左に旋回。大きな機体に似合わない小回りの効く旋回ですぐに相手の後ろを取った。

そしてすかさず短距離ミサイルAIM-9サイドワインダーでロックオンしようとしたが敵機は翔の攻撃から逃れようと、左右に機体を激しく旋回させるが、翔はHUDの照準からそれを逃さない。

緑色のシンボルが赤に変わり、HUDに『SHOOT』と表示された。『発射しろ。今なら当てられる』とコンピューターはディスプレイを通し、翔に語りかけた。そして、指示通り翔は引き金に指を掛けて宣言した。

『イーグル3。フォックス2！！』

フォックス2とは、短距離ミサイルの発射する際のサインである。翔はミサイルを放った。サイドワインダーは相手の熱で追跡するよう出来ている。相手のエンジンの廃熱を手がかりに敵機を追尾する。そして、ミサイルはその役目を果たした。

着弾。そして爆発。

『イーグル3グッドキル!!』

フランクからの無線が入る。しかし翔は褒められたところで気を抜かない。なんせ今は交戦中だからだ。気を抜いたら殺される。これは、戦場の掟だ。

ビィィ

再び、ロックオンアラートが響く。今度は後ろでも正面でもない。上からだ。

『機銃^{ガン}ロックだ』

翔は刹那と呼べる時間で予測した。相手は上から突き抜けるように機銃を撃つと。

だが、それは違った。考える前に体が動く。手が動く。そして、機体が動いた。

相手の反応より早く翔は機を右に旋回させた。

そして、フランクは翔のいた空間に30ミリの鉛弾を放った。無論、弾筋は大気を切り裂くだけで目標を貫く事は出来なかった。

左斜め下に翔はF-28を旋回させ、一撃離脱をしようとした、敵機の追撃を開始する。

「待ちやがれ。こんにやろう!!」

相手の尻についた翔はすかさずミサイルロックをした。距離はざつと400メートル。ミサイルを撃つのに近すぎると判断した翔は、操縦桿にある武器選択ボタンを操作。M61A2ガトリング砲を選択した。

翔は敵機に照準を合が敵機は下方にスプリットS機動をして翔の照準から逃れた。スプリットSとは、機体の天地を逆さまにして下方に旋回するという機動だ。

「わっ」

さすがの翔も声を上げて驚く。だが、彼は敵機の軌跡を追って彼も同じ機動で追撃。旋回半径の勝るF-28は、スホーイが旋回を行っている最中に彼のワイバーンは敵機に照準が定まる。そして翔は迷う事無く発砲した。

並大抵の火器の銃声では無い。ガトリング砲の銃声はむしろ『チェインソー』の機動音に似ている。

20ミリの弾丸の嵐は、美しさに定評のあるフランクのボディを貫く、いや、粉々にした。

また、大空に爆炎が燃え上がった。

「次は？」

翔は竜也に問うた。

『もう、いない』

「そうか」

ICSの通信に割り込んで空母から無線が入る。

『デビルより、ヘルハウンズへ。敵機の殲滅を確認。帰艦を許可する』

『イーグル1了解』

『ハーピー1了解』

『フォックス1了解』

戦闘は終わった。翔たちの勝利で。そして、戦闘を終えた艦載機たちは自分たちの空母に帰る。

MISSION 3 問題児のドッグファイト（後書き）

<バレルロール>

解説が難しいのでこちらのリンクをご覧ください

http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%90%E3%83%AC%E3%83%AB%E3%83%AD%E3%83%BC%E3%83%AB%E3%83%9E%E3%83%8B%E3%83%A5%E3%83%BC%E3%83%90%29

<スプリットS>

http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B9%E3%83%97%E3%83%AA%E3%83%83%E3%83%88S

MISSION 4 夕日の誓い

2015年 4月13日 午前8時32分

蒼碧の空で銀翼の竜は鬼ごっこをしていた。一機は左右に激しく旋回していて、もう一機はそれに必死に喰らい付いていた。

イーグル小隊は現在、模擬戦を行っている。イーグル1と2の編隊^{エレメント}対3と4の編隊が機銃だけの格闘戦訓練だ。

「ちくしょう!! 動くなよ……」

翔は自分のガンサイトに前方のF-28A、一条機を押さえようとするが、弄ばれる一方だ。

「さすが隊長だ」

そう呟く翔。そして、一条機は左下に旋回。しかし、その旋回の角度は緩かった。緩い旋回は隙が大きく簡単に狙いやすい。

「もらった!!」

翔はこの機を待っていたと言わんばかりにその背を追い、HUDのガンレティクルに敵機を収めた。そして、トリガーに指をかけた。

放つ寸前。コックピットに機銃ロックのアラートがコックピット内にこだました。

「何!?!」

翔は慌てて振り向き、後方を確認した。もう一機のF-28、イーグル2が翔の後方を追撃していたのだ。立場は逆転させられた。

さっきの甘い旋回は罠で、2の銃撃を補助するための布石だった。それに翔は気づく。が、遅すぎた。

気付いた頃には、イーグル2は翔に向け20ミリの砲弾の嵐を叩き込んでいた。

翔のF-28は、穴の変わりに赤いペイントの跡が残っていた。模擬弾だ。ベイト

『イーグル3、アウトです』

翔の耳を何処か抜けた少女の声がくすぐった。イーグル2のパイロット、アンネ・ハルトマン少尉だ。

『模擬戦は終了だ。帰還するぞ』

『へいへい』

隊長の無線に翔はへそを曲げた様子で応答。続く無線はフランクからだった。

『すまん、翔。さすがにアリスには勝てなかったわ』

どうやらフランク、翔がやられるのと同時にイーグル2に落とされたようだった。

『大丈夫だつて。次ぎ頑張ろうぜ』

『そうだな』

イーグル小隊は、自分たちの母艦へ舵を向け帰還するのであった。

昼夜を問わず鳴り響く金属の音。鼻を突くオイルとジェット燃料の臭い。

幾多の男女が工具を手に機体と向き合う場所、ハンガーデッキに翔フランクは訪れた。

「で、今回の反省は点は何だ？」

翔がフランクに怒りを溜めた表情で問うた。フランクは耳をかきながら答える。

「俺の空戦技術じゃね？」

「そうだ。この、下手くそ」

二人は今、F-28Bの217号機の駐機されている場所いる。

「でもよお。昨日の戦闘で通算撃墜数3機だぜ」

誇らしげにフランクは翔に愛機の機首横に張られている戦闘機のステッカー、撃墜数を表すマークを見せびらかした。

「何が『凄いだろ?』だ!!まず、謝罪しろよ!!」

「すまん、すまん。で、お前は?」

フランクは謝罪のジェスチャーを見せる。

「4機だ」

刹那、フランクは顔を凍りつかす。

「ま、負けた」

「当然だ。エースになる目標がある俺だ、お前になんか引けを取るか」

鼻高々に翔は言った。

「にしても、カッコいいよな。28は」

フランクの言葉に翔は首肯で返した。

F-28には、最新鋭のステレス機にある特有な角張りが無い。むしろ、それらの機体より少し古めのシルエットをしている。

双発のエンジンに斜めの二枚尾翼。失速防止のストレーキがかかった主翼は現役中の戦闘攻撃機、F/A-18を髣髴させた。

「たまらないな。カワイ娘ちゃん」

フランクは自機の装甲板を手の甲でコンコンと叩いた。その姿はまるで、どこぞの砂漠にある基地のワイルドなテストパイロットのようだった。

「あら、翔君にフランク君」

彼らの隣に駐機されている、単座のA型の215号機からその人影は現れた。

その正体は、士官の制服を着た、ウェーブのかかった美しいブロードのセミロング。凜とした碧眼を持つ少女だった。

「お、アリスじゃん」

アリシア・フォン・フランベルク少尉は翔と同じイーグル小隊に所属するパイロットでコールサインはイーグル2だ。通称はアリス。

「どうしたのですか？」

アリスは翔たちに問うた。

「ただ、機体を見に來ただけだ」

「そうなんですか」

「そういうアリスはどうなんだ？」

翔の質問にアリスは答える。

「私はこれを……」

彼女の手にはファイルが握られていた。

「整備資料か？」

「はい」

そう言っただけで彼女が自分の胸元にファイルを持っていった刹那、紙の雨がアイスの足元に降った。どうやら、ファイルを戻した際に口を下にしてしまったらしい。

「あわわわ……ごめんなさい」

誰に謝っているか分からないが、彼女は急いで書類を拾い始めた。

「手伝うよ」

フランクはそう言っただけで拾い始める。それに体が勝手に反応して翔も体勢を低め、彼も手伝い始めた。

その結果、ものの数秒で回収作業は終わった。

「ありがとうございます」

丁寧のアリスはお辞儀を二人にする。

「良いつてことよ」

フランクは気前のいい笑顔で彼女の礼に返答した。

「で、実際それは何なの？」

翔の問いに、アリスは『はっ』とした様子を見せ答える。

「整備記録です」

整備記録とは、機体の異常などを記した書類である。

「へえ、偉いな。俺は那瓊の話聞き流すだけなんだけど」

「それは良くないと思います」

「何で？」

アイスは翔に諭すような口調で教えを説く。

「機体は、空での命綱……その異常は知っとくべきですよ」

「そ、そうか」

翔は素直に頷く。

「あれれ？翔君、どうしたのかな？」

横でフランクが翔の揚げ足を取った。普段は反抗してばかりの翔が簡単に言いくるめられる姿が、フランクには面白くてしょうがなかった。

「あんだよ、フランク。そういうお前はどつなんだよ？」

「ふふふ……聞いて驚け!!俺は……」

一言切ったフランクの顔には『自信』の二文字しかない。

「その……読んでも、聞いても、分かりません」

語尾は消えそうなくらいに小さな声だった。

「パイロット辞める。お前」

冷やかな視線を翔は、フランクに送った。

十

同日 午後12時45分

「いやー腹減ったな」

フランクは腹の虫を鳴らしながら翔と一緒に廊下を歩いていた。時は、昼飯時。健全な男子なら昼食を取る時間だ。二人は現在、パイロットの集まる第三士官食堂を目指している最中なのだ。

「翔、今日は何食う?」

「どうしようかな?」

さっ

背後から疾風のような『何か』が二人の背後をよぎる。しかし、二人は気づいていない。背後を常時、警戒するパイロットなのに。

「んじゃ、俺は……うごあ!!」

翔の股間部に鈍い衝撃が走った。

推測できるのは背後からの攻撃。

後ろか!!

倒れる寸前。瞬間よりも短い時間に翔は後方を目で追った。

巡る視界。その中にいたのは、足を突き上げている少女……いや、幼女がいた。

白い布でツインに結われた黒い長髪が、蹴りの振動で揺れていた。そして、その黒い瞳は他人を寄せ付けない何かが宿っている。

オペレーターの北条神海だ。ほつじみづみ

「はあ……すつとした」

地面にうつ伏せに倒れた翔をむすつとした表情で見下ろす。その瞳はまるで汚物を見て、不快感を露にしたようだった。

「うわぁ……痛そう」

男子にしかない共通感覚が、フランクに彼の股間部を両手で覆わせた。

「な……何すんだよ？」

力なく翔は神海に訊く。

「ふん、お前が私に昨日言ったことを思い出せ」

「昨日……あ!」

彼の脳内はひとつの答えを見出す。

俺に指図できるのは、Bカップからだ

「思い出したか?でも、もう遅いぞ。お前は私のプライドを……」

「小さいこと気にすんなよ」

翔は彼女の言葉を遮った。しかし、このさり気ない言葉が彼女の怒りを買うとも知らずに。

「まだ言うかあああああああ!小さいって!」

うつ伏せに倒れた翔にまたがり、そのあごを両の手で曲がらない方向へ持ち上げた。

「出ました!!!キャメルクラッチ!!!」

実況（傍観者）のフランクは意気揚々と技の名を叫び上げる。

「痛い!!!痛い!!!ごめん!!!マジごめん!!!マジでギブ!!!」

じたばたと翔はもがき苦しみ、神海の手をタップした。

そして、試合終了。

「次ぎ言ったら、新開発のコブラツイストだからな!!」

「はひ」

力尽きた翔を見るなり、きびすを返し、その場から神海はそそくさと歩き去った。

十

同日 午後6時56分

日が水平線に吸い込まれる頃だった。水面^{みなも}を照らす茜色の夕日を翔は独りで眺めていた。

その美しさには魔性の何かが潜んでいて、翔を今にも吸い込んでしまふくらい広大で美しかった。

この夕日を見るのは翔の日課だ。

彼には夕日を見る趣味など無い。

だが来てしまふ。理由も分からずに。

「翔」

彼の背後に気配が現れた。聞き覚え簿ある声の持ち主は、翔の相棒である宮島竜也だ。

「どうしたんだよ？急に」

「やっぱしここか」

竜也はそう言って、彼の右隣に歩み寄った。そして、翔と同じ夕日に視線を合わせ、口を開く。

「ちょっと良いか？」

「ああ」

声だけの返事を翔はした。

「どうして、エースに成りたいんだ？」

「は？」

思わず聞き返したくなるような急な質問だった。

竜也の言うエースパイロットとは、敵機を五機撃墜したパイロットに与えられる称号だ。腕のいいパイロットの代名詞とも呼べる。

「ほらさ、お前いつつもさ『エースに俺はなる』とか言てんじゃん？どこぞの漫画みたいにさ」

「だからって何だよ？」

「いや……お前の憧れってさ何処か危なっかしいんだよ」

竜也は翔の顔を見る。そして、話し続けた。

「翔はいつも、一人で戦ってたんだよ。自分の身を省みずさ……何かに取り憑かれたようにさ」

「そうかい」

そう答えた翔の肩に竜也は手を置いて、自分の方へ向き直させた。

「訊いてくれ。俺の妹の奈々子のことを知ってるな」

妹の奈々子……竜也のたった一人の肉親だ。

彼の真剣な眼差しを受け取った翔もそれに無意識に真剣な態度を取る。

「ああ」

「もしさ、俺が……いや、俺達が死んじまったら、あいつは路頭に迷うハメになる」

手すりを握る竜也の手が震えている。

「それが……それが怖くて堪らないんだ!!」

竜也の語勢が激しくなった。涙を浮かべそうな彼は背を丸めた。本当に怖いのだろう。

「だからさ……」

「わぁーってるよ」

これは翔の口癖だ。そして口をつぐんでいた彼は続けた。

「俺達は死なない。死なないで生き延びる」

「翔？」

「でも、レーダーの読めない俺だけじゃ無理だ。だけどお前がいる。だから、エースになる為、生き延びるために竜也……お前が必要だ」

翔からの言葉。意外な言葉が竜也にはうれしかった。

「ありがとう」

その言葉しか出なかった。そして、二人は互いの拳を重ねた。

そして暗黙の誓いを立てた。

生き延びると。

MISSION 4 夕日の誓い（後書き）

更新が凄い勢いで遅れました。

本当にごめんなさい。

次は多分12月の頭くらいだと思われます

MISSION 5 星空の下

2015年 4月14日 午後6時42分

太平洋 空母 J・グラフトン VF-184 ヘルハNZ 待機室

「今回の作戦は明日に行われる第7人工島に爆撃。SAM（地对空ミサイル）及び対空車両を破壊することだ」

一条大尉は待機室のスクリーンに映し出された地図、ソ連軍の補給用の人工島である第7人工島の説明を少年達パイロットに行っている最中だ。

「サー」

眼鏡を掛けた金髪碧眼のイギリス人、エドワード・エンフィールド少尉が拳手した。

「何だ？」

「はっ。何故、爆撃任務をこんな少数。しかも、戦闘機で行うのでありますか？」

エドは自分達、イーグル3と4の乗員クルーがこの場に集められたことを訝しく思った。

「悪い、そこはまだ、説明不足だったな。まず、戦闘機ファイバーンで行う理由は、A-13じゃ遅すぎる。この、ポイントから上陸するから……」

ポインターで湾を指し明は説明を続けた。

「このポイントの向こうに行ったら、まずA-13なら中央の対空砲で蜂の巣。でも、28ならその上昇力で一撃離脱できる」

「わかりました。しかし何故、我々が？」

明は『ふっ』と笑みを浮かべ、答えた。

「お前らがこの隊にいるB型のクルーの中で一番このミッションに向いているからだよ」

その瞬間、4人の間に小さなざわめきが生まれる。

「フランクは対地攻撃がピカイチ。竜也はECM（電子攻撃）がずば抜けてうまい。そして、エドと翔はこいつらの最高のパートナーだ。この、作戦はお前らしか出来ない。以上だ」

「「はい」」

皆、起立して明に敬礼。

「風の導きがあらんことを」

と、解散際に言う祈りの言葉を明は敬礼と共に告げた。

十

同日 午後11時19分 太平洋

満月がきれいな夜だった。

2機のF-28Bは黒い雲を見下ろせるほどの高度を亜音速で直進している。月明かりが銀翼を反射する光景は幻想的としか言えない。

「星が綺麗だな」

と、竜也はつぶやく。それにつられ翔も空を仰ぎ見る。

彼の視界に満天の星空が広がった。満天を通り越したおぞましいほどの星空。それは、宇宙の映し鏡のように星を幾千も内包している。

「ああ。すごいな」

「奈々子に見せてやりたいな」

『見せられるさ。この戦争が終われば』

無線で割り込んだフランクの声。その声に竜也は素直に答える。

「ありがとう。フランク」

『しかし、お前は本当に妹思いなんだな』

フランクの相棒のエドも竜也に言った。

「まあな。戦争でさ……俺達、両親に死なれちまったんだ。だからさ……二人で生きてきたんだ。それで今、兵隊やってんだぜ？ ホント、笑えるよな？」

笑い声が響く。どこか、悲しい笑い声。しかし、いくら誤魔化そう

としても、皆解っている。彼の悲しみが。

多くの志願した少年兵は竜也と同じ境遇なのだ。生きていくために軍に入る。

「ま、こんな話より任務だ！！目標まであと、200。そろそろ、ECMの準備するぞ」

竜也は空気を変えるために明るい虚勢を張る。

「イーグル3（翔）より、4へ。これより、低空飛行するぞ」

翔は酸素マスクを装着した。途端に、口の中にゴム臭い冷たい空気が広がる。

『4了解。高度を一気に下げるぞ』

2機のワイバーンは急降下を始める。

対空レーダーには弱点がある。それは、捕捉する高度を高くするために仰角を高くしてあることだ。つまりは、低空の敵機を補足出来ないという事だ。いわば『灯台もと暗し』を具現する為に彼らは低空飛行をするのである。

HUDの高度計が凄まじい勢いで、その数値を落としていくのを翔は見る。

1500

1200

920

650

F-28は落下の法則に従い、エンジンの推進力を糧に落下速度を緩めず、自殺のような降下を止めない。

300

120

「今だ!!」

翔は操縦桿を力任せに引く。

激しいGがコックピットに襲う。最大速度のF1カーのコーナリングを遙かにしのぐ力が翔達に襲い掛かった。

「高度は？」

「70、良い高度だ。いっちょやるか」

竜也はピアノを弾く奏者のような手つきでディスプレイを叩く。

ECMとは、敵のレーダーの波長を拾い、それに妨害電波を出して敵のレーダーを無効化にすることである。

それに長けているのが、宮島竜也少尉だ。

並みのオペレーターが行う半分の時間で竜也はやってのけてしまう。

「終わったぞ」

翔も舌を巻く様な速さでECMは終わった。翔は竜也に問う。

「距離は？」

「えと……150かな？」

しかし、レーダー士としての腕は中のである。

「解った。おい、フランク。攻撃開始だ」

『あいよ、俺は先行して。こいつら、落とすぜ』

「解った。行つて来い」

そう言て翔は安全装置を解除。武装を長距離クラスターミサイルのAGM-99『ウォーホーク』を選択した。

AGM-99『ウォーホーク』とは、目標上空まで飛翔。その後に小型爆弾を散布して広域に被害を及ぼすミサイルである。

ミサイルは敵の選定を開始した。

電子音が脈打つ。そして、ついに選定は終わった。

刹那、HUDに複数のシンボルが表示される。

しかし、距離はまだ遠い。

ミサイルは放たれる瞬間を待っている。

そして時は来た……ピープ音と共に。

「イーグル3、KNIFE1」

コールの後、彼はトリガーを引き絞る。

ガコンと、金属音を立て戦斧はその頸城を外された。

推進剤は燃え上がり、ミサイルを目標へと飛翔させる。

数秒も経たなかった。遙か向こうの水平線で眩い明かりが点る。ミサイルが着弾したようだ。

そのころ、フランクは低空飛行を遙かにしのぐ高度、超低空飛行で目標へと肉薄する。

高度50メートルを音速近い速さでフランクは飛ぶ。

呼吸の乱れ一つが命を奪うような高度。フランクは息をもしないような集中力で操縦桿を握る。

フランクはプロの攻撃機乗りにも劣らぬ対地攻撃の腕を持っている。

「エド、目標は？」

「対空車両5だ。いけるか？」

「当然」

フランクはMk-91コブラ・アイ爆弾を選択した。

コブラ・アイとはクラスター爆弾の一種で、小型爆弾を400平方メートルにばら撒く事を目標とするクラスター爆弾爆弾である。

「Com'on Com'on」

マスクの下でフランクは呟く。

HUDに目標の対空車両のシンボルが浮かび上がった。彼は、ライダーペダルを踏み、ヨーイング。目標への微調整をする。

だが、こうしている間に、フランク機は敵の対空砲の射程距離に入ってしまった。そして、対空砲は火炎の祝福を火竜にし始めた。

炸裂する砲弾の海をフランクは旋回もせず猛進する。その姿は猪と^{ウォーフォッグ}も呼べる。

「フランク！！高度を上げろ」

エドの警告を無視して突き進むフランクの目線には対空砲が数門。

フランクはどこに落とせば一番被害をこうむれるか、刹那に判断した。

「ここだ!!」

フランクはトリガーを弾く。パイロンは命令通りにコブラ・アイを投下する。風に煽^{あお}られながらも確実に、暴力の雨を降らした。

爆発が起きた途端に対空砲火は止まった。フランクはその気に乗じ、緊急離脱。対空砲の脅威から逃れるために遙か上空、イーグル3との集合地点へと急上昇した。

対空砲も手が届かないような高度へF-28は物の5分で上昇し終える。

そしてフランクは赤く光る編隊灯の明かりを見つけ、その横に機を進めた。

フランクの生存を確認した翔は封鎖された無線を開き、フランクに通信した。

「どうだった？」

『全部やった』

普段のフランクでは有り得ないような抑揚の無い口調で彼は答えた。

『疲れたから、休むわ』

ブツリと、一方的にフランクのチャンネルは切られた。

無理も無い。心を磨り減るような操縦をしていたのだ。こうなることは自明の理である。

そんな中、竜也は自機の後方にレーダー反応を見取った。

「ん？反応だ。後方、上？まさか……」

竜也は瞬時に理解した。

敵機がいると。

「翔！！後方に何かいる！！」

「ん？」

翔は後方を見る。何もいなかった。しかし、その左上に『それはいた。』

そのフォルムは月光で露になっている。

漆黒のボディに特徴的な前進翼。Su47ベルクートだ。

「ベルクート？」

刹那、ロックオンアラートがコックピット内に響く。

『翔。援護する！！』

フランクの無線に翔は返答する。

「対地装備しかないお前には無理だ！！先に行け！！」

『……わかった。風の導きがあらんことを』

フランクは口惜しそうに言い残し、左に旋回。その場から離れた。彼は知っている。自分の空中戦の弱さを。故にこの場は逃げるべきだと彼は非常ながらも判断した。

「行くぞ」

翔は、ECNポッドをパージ。臨戦態勢をとる。機体を軽くするためにだ。なんせ、今回の相手はエースパイロットと翔は判断したのだから。

Su47はピーキーさ故に乗り手を選ぶといわれるほどの機体だ。

その担い手は『エース』しかない。

エースになるための最後の一機が敵エース。これほどの僥倖は彼の人生で初めてなのかもしれない。

そして背後を取られた状態から翔のドッグファイトは始まった。

翔は操縦桿を左右に振り回しこの不利な状況から抜け出すことにした。しかし、相手はしっかりと翔の背後から離れようしない。

激しい旋回を互いに繰り返す。見えない終わりに腹を立てた翔はある決断を下す。

龍也。あれすつぞ」

「あれって！？ってうわっ！！」

翔はエンジンの出力を下げ、エアブレーキを作動。そして操縦桿を手前に引き倒し、機首の迎え角を上げ宙返りを始める。Gに締め付けられながらも翔はバックミラーを確認。ミラーには敵機の機影が映っていた。

「しっかり付いて来い！！ソ連野郎！！」

ループの後半、ヘッドアップディスプレイの計器が迎え角を108度、速度は420キロと表示する。

「今だ！！」

翔はスロットルにある一つのボタンを押した。エアブレーキの作動ボタンだ。

『STALL』

機体の中に機械的な声が響く。

推力も無く速度も無い飛行機に起きること、それは揚力の喪失。ようは失速だ。

力無く、翔の機体は落下を開始した。ワイバーン

揚力を失い落下するF-28の風防付近を通過するベルクートを翔はほくそ笑みながら見る。

そして、フルスロットルにした。出力にものを言わせ、ワイバーン

はは失速状態から復帰。そのままベルクートの背中を取る。

「よし!!」

「サイドワインダーをお見舞いしてやれ!!」

直線的に飛ぶベルクートを翔はミサイルロック。

「ターゲット・ロック、フォックス……」

そう言つてトリガーを引こうとした。

敵は機体を垂直にした。すると機体は止まっているかのようになり、翔の機体は敵機を追い抜いてしまった……

「コ、コブラ?」

翔はマスクの下で舌打ちをした。そして翔の機体の中に人間の裏返つた声のような電子音が鳴り響いた。

「畜生!!」

翔は左に急旋回し相手から逃れようする。だが、後方から夜の闇を切り裂くような光を翔は見た。その閃光は火竜の翼を啄ばんだ。

黒い煙を吹きながら、最新鋭の戦闘機は漆黒の海へと消え去る。

MISSION 5 星空の下（後書き）

前進翼

空機の翼の平面形の分類で、翼を前に傾けて取り付けけたもの。翼つけ根に対し翼端部が前方にある。

簡単に言うとVのような翼の形である。

例 VF - 19 YF - 29

MISSION 6 戦場の正義

翔はパラシュート降下をしている。

ほんの数分前までは颯爽と空を舞っていたが、今は翼を失いただ落ちるだけだった。

海面にその身を打ちつけた瞬間、彼の皮膚に春海の冷たさがほとばしった。

着水の衝撃で沈んだ彼の体を救命胴衣が浮かす。

口の中が塩辛く、忌々しげに翔は海水を吐き捨てた。

「ここは？」

翔は辺りを見回す。

何も無かった。あるのは水平線と星空。あとは闇。それだけだった。

翔は共に着水したであろう竜也に連絡を取るために非常用の無線機を使うことにした。チャンネル調節の無線を回したが、帰ってくるのはノイズだけだった。

「畜生」

翔は毒づき、苛立ちに身を任せ通信機を放った。

虚しい水の音が無音の空間にこだました。

することも無く翔は空を仰いだ。彼の眼中に広がったのは、広い星空だけだった。そして、その周りを取り囲むのは無限の闇の海。

大海と星空に挟まれた彼は実感している。自分の矮小さを。

波に逆らう事もままならず、何処かへ流される自分が無性に悔しく、翔は力一杯に水面を叩いた。

「くそっ」

叩いても飛沫が跳ね上がるだけで、翔の心は一向に晴れることは無かった。そして、彼は何度も何度も水面を叩いた。

「何してんだよ、俺は？何時まで漂えば良いんだよ？」

肩で息をしながら翔は暗闇の中、誰かに問う。

数分が無限に感じる空間に一筋の光が射し込んだ。それは文字通り、光を放った船舶らしき物だ。その存在が翔には無性に嬉しかった。

この氷の様な孤独な世界で、誰かがいる。翔にはそれが嬉しくてたまらなかった。

「俺はここだ！！」

自己の存在を主張する声が嬉しさと共に翔の喉を駆け上がる。

しかし何も起きなかった。

「んなら……」

翔は脇の辺りに手を伸ばし、手探りで何かを探り出そうとする。

「あつた」

翔は金属の確かな質感を手にその何かを抜き出す。月光がその何かを照らす。金属光沢を帯びた鉄、くろがねコルトM12だ。

M12とは、45口径の自動拳銃オートマチックで携弾数は12+1発。100年前のハンドガン、M1911を改修したモデルである。カスタム

翔はスライドセーフティを解除。スライドを引き、初弾を薬室内に装填した。カチャリと小気味の良い音を立て45ACP弾は薬室内に送り込まれ、放たれる瞬間を待つ。

翔はトリガーに指を掛けた。

重い衝撃。

マズルフラッシュ
閃く銃火。

全ては、風宮翔の存在をあの手知らすためである。

翔は訓練以来、感じられなかった生々しい反動にひるまず引き金を引く。

一発。

もう一発。

遙かなる天空へ向け彼は銃を撃ち放った。

「来てくれ!!」

翔はすぐる思いで叫んだ。

すると、彼の思いが届いたかのように船がこちらに近づいて来る事に翔は気づく。

「よっし」

孤独な世界から戻れると知った翔は嬉しさのあまり声を上げ、拳を握り喜んだ。

きつと救難信号を拾った船で、自分と竜也を回収しに来た船だと、翔は信じる。

数分後、船は彼の近くに停泊した。

サイズは漁船クラスであろう。暗くてあまり確認は出来ないが、船首に大きな捕鯨用のアンカーのような何かが据え置かれている。

そして、サーチライトが翔の近くを照らし始めた。

「うわっ!!」

闇に慣れた目のにサーチライトの光は最大級の拷問に近かった。翔は目を凝らし、光の向こうを見た。

「え？」

光りの向こうには兵士がいた。銃を構え、敵意をむき出しにした年端行かない少年兵が。

スピーカーからはわけの分からない言語が流され、妙なアクセントの英語で『Drop your weapons』と。そして次は日本語で放送される。

『ブキヲステテウコウシロ』

その言葉が翔に現実を見せた。今の自分の立場、これから、起きるのであろう未来を。

十

鉄格子から朝日が空間を照らした。

最悪の状況で翔は朝日を仰ぐことになった。ベッドに座りながら一睡もせず彼は警戒の目を止めずにいる。

「冗談じゃねえよ」

翔は呟く。

翔のパイロット候補生の頃に習ったソ連兵の姿はまさに『鬼畜』だった。

捕まえた兵士に地獄のような拷問をし、吐かせる物吐かしたら虫け

らのように殺す。それが『ソ連兵』だと翔は教わった。

翔含む並大抵の兵士なら、この状況で睡眠を取る図太い精神を持ち合わせてなどいない。

だが、人間の生理現象は恐ろしい。情けない音を立て、彼の胃袋は腹の虫と呼ばれるレスキューアームを鳴らした。

「腹減った」

翔は腕を枕にベッドに倒れこむ。

「大丈夫だよな？ 竜也」

翔ははぐれた竜也の事を気に掛けていた。この牢には自分しかないからである。

静かな空間。差し込む木漏れ日が仰向きの翔の臉を重くさせる。張り詰めた空気だが、それらに勝る昨日の作戦の疲れが残る翔にそれらは眠りを強要させた。

翔の意識は吸い込まれるように眠りにつく。

空はどこか暗く、満月が妖しく輝いていた。

地上はなく、あるのは火の海。そして、聞こえるのは人々の悲鳴だけ。

地獄のような場所だ。いや、地獄そのものだった。

戦場という名の地獄。罪のない市民がソ連の空爆から狂気の表情を浮かべ逃げまどっていた。

起きて、起きてよ。お母さん

血溜まりに倒れる女性を揺さぶる男の子がいた。その表情は周りの大人と違ってどこか平然としてた。日曜の朝、寝坊した母を起こすような表情だ。

起きてよ、こんなところで寝たら風邪引くよ。

ねえ。起きてったら

起きてよ

起きて

「起きてください」

幻想は消え、翔は今に戻った。体中に汗が滲んでいやな感覚が体によぎる。

「目が覚めましたか？」

翔の隣で声がした。この声が、翔の意識をここに戻した。声の主を
探すために彼は首を声をたどって傾ける。

そこには少女が一人いる。

あどけない表情を残した少女。翔と同じ歳かそれより少し年下な少女だった。

ストレートで長いブラウンの長髪が彼女の白い、雪のような肌を際だたせている。

「大丈夫ですか？うなされてましたよ」

少女は続けて言う。訛のないとても綺麗な日本語で。

「大丈夫だ。てか誰だ。お前？」

急に自分の牢屋の中に現れた少女を見たら誰もがこう訊くであろう。少女は何かを閃いたかのような表情を見せ、答える。

「あ、ごめんなさい。私はソビエト第16航空教導隊の訓練兵のクララ・ハリヤスキー准尉です」

敵か。

翔は少女に無気力な敵意の眼差しを向ける。

「で、何の用だよ」

「尋問です。一緒に来てください」

翔の視線をもろともせず笑顔でクララと名乗った少女は言った。そして彼女は手錠を出し翔の手に掛けた。

「で、捕虜の扱いは条約に則るのか？」

翔は意地の悪い笑みを浮かべた。

彼がパイロットの訓練性だった頃、ソビエトの兵士は人の腸をむさぼるような奴らだと習った。故に人の法など知らないと翔は見限っているのだ。

しかし彼女は翔の皮肉満面の笑みに太陽のような輝かしい笑みで返し、言う。

「はい。人権法に則りますよ」

「へ？」

意外な答えに翔は素っ頓狂な声を上げ驚いたのであった。

十

翔は尋問室のある建物へ行くため、クララに外へ連れられた。

穏やかな日差しの独房の外。

要塞にしてはのどかすぎる場所だった。

少女に連れられている翔の目には談笑する婦人達の姿。その周りで笑顔で遊んでいる子供達の姿が見えた。

「おい、ここって本当に要塞なのか？」

その光景を見たものなら誰でも言いたくなるようなことを翔は彼女に聞いた。

「はい。第7軍用島です」

「で、何で民間人がいるんだよ？」

普通、軍事機密の漏洩を防止するために民間人はたとえ軍属といえども要塞の中には入れない。ましてや島が丸ごと要塞なら、民間人が入る事など天地がひっくり返ってもあり得ないことだ。

「彼らは難民です。戦争が生んだ」

彼女の語尾がどことなく寂しげだった。敵といえども翔にも解ることだった。

「それで私たちが保護しているんです」

無理に明るく振る舞う彼女の笑顔という仮面からは彼女の奥深い場所にある悲しみを隠しきることなど出来ない。

その碧眼の奥には今の世を嘆くような何かがあった。

「そうか・・・がへっ」

そう言い終わった途端に、翔の股間部に衝撃が走った。翔の後方に一人のまだ小学生ぐらいの少年がいた。小さいながらも彼の出せる最大の敵意の眼差しを翔に送っていた。

「こら。だめでしょ、暴力を振るっちゃ」

クララが後ろの男の子を穏やかな口調でしかりつける。

「だって・・・こいつ悪者なんでしょ？しほんしゅぎの」

口をとがらせ彼は反論する。しかし、クララは膝をつき、彼の手を優しく握って言う。

「悪者なんていないの。敵と味方に分かれたただけなんだよ。それに、戦争をしている人に良い人も悪い人もいない」

「何でさ？」

男の子は納得がいかずクララに問う。

「だって、戦争自体が悪いことなんだから。人が人を傷つけて良い事なんて無いの。だから、お兄ちゃんに、ごめんなさいしなさい」

「・・・はい。ごめんなさいクララ姉ちゃん」

「私じゃないよ。お兄ちゃんに」

男の子は翔の方に向き言う。

「ごめんなさい」

言った後に、彼はどこかへ走り去る。

一連の光景を見た翔はどこか不思議な感覚を覚えた。

優しい何か。温かい何かを。

「大丈夫ですか？」

ぼうつとしていた翔の耳に彼女の声が響いた。

「ああ」

「では、行きましょうか」

そう言って彼女は手錠がかかった翔の手を引き、歩きだした。

MISSION 7 過去と今

「おわっちまった」

夕焼けの刻、尋問を終えた翔は意外な顔をして牢に戻った。

尋問と言ってもただの尋問だった。

爪を剥いだり指を切り落したりもしなければ殴られもしなかった。聞かれたことは所属と、階級、部隊のことなどを尋問官に話しただけだ。

かつこつけて、唾でも吐きつけてやろうと思ったが出来なかった。

尋問官はあのクララという少女だったからだ。

終わったらそのまま独房へ戻され、それっきり。

翔は少し色の付いたシーツのベッドに横になり水銀灯の明かりを見つめる。

翔の心にはある疑問がふと沸き上がる。

「俺が教わってきたソ連の連中とは違うぞ」

彼の知っていた「敵」の姿は「鬼畜」の二文字だった。

敵を無慈悲かつ残忍に殺し、自国民からは食料を奪い、女を犯す。

そんな野蛮で下劣を極めた最低の生命体を滅ぼすために自分達は戦

っている。と兵学校の教官から教わった。

しかし、彼女やここにいる兵士は違う。餓民から食物を奪うどころか保護し、敵への扱いも紳士的だ。

「どうなっただ？」

ぼそりと翔は呟く。

「風宮少尉・・・」

鉄格子の前にはお盆を持ったアリスがいた。

「どうした？」

「食事です」

言われてみたら不安が無くなったせいかな空腹感が彼の胃袋を刺激した。

鍵のかかったドアを開けて入ってきたアリス。彼女は翔にお盆を差し出した。そこには固そうなパンにスープ、いわゆるボルシチが乗せられている。

「失礼します。きやつー!!」

すてん、と言わんばかりに派手に転倒したクララは食事の中身を派手にぶちまけた。しかし、最悪な出来事がそこで起きた。

「熱っ!!」

翔は苦悶の表情と悲鳴を露わにした。彼の頭にはとろみがあった液体、ボルシチが乗っていた。

「あ……すみません！……くすっ」

クララは吹いてしまった。翔の今の惨状が異様に漫画じみていたからだ。

「んだよ。俺にアホとでも言いたいのかよ？」

「いえ……少しその……おかしくて……」

息が切れそうな彼女の笑い声に翔も何故か解らないが笑えてきた。

「で……これどうすんだよ？」

少し間をおいて翔はアリスに問う。

「あ、すみません。シャワー使ってください。シャワー室まで案内します」

そう言っただけで彼女は翔をシャワー室に案内することにした。シャワー室は階段を上がった階層にあった。

「案内がとうな」

そう言っただけで翔は男のマークの書かれたドアをくぐった。

午後 6時43分

空母 J・グラフトン

吉田光は焦りの色を満面に出し、廊下を歩いている。

翔・・・竜也

ため息をつく。彼女の友人、風宮翔が爆撃任務で撃墜されたのをきっかけに光の平静という文字を心から失った。

「光ちゃん・・・」

背後から声がした。か細くい声だった。その声の持ち主は黒く長い髪を持つ少女だ。彼女の名は秋月亜衣、シックベイ病棟で看護婦の任に着いている。

「あ、亜衣。どうしたの？」

「・・・さつきから辛そうだよ？休みなよ・・・」

「大丈夫・・・何ともないよ」

「嘘。翔君と竜也君が心配なんですよ？」

「そんな訳・・・」

光はこの先の言葉が出なかった。

無い、といえは嘘になる。有る、とも言えずに言葉を濁す。今の彼女の心境は至極辛かった。

そんな二人の目の前にフランクとエド、アリスが現れた。しかし、彼らは耐G胴衣を身に纏い、ヘルメットバッグを傍らに担いでいた。

「どうしたの？フランク、その格好」

光が問う。

「第七人工島に総攻撃を掛けるんだ」

エドが応える。しかし、その傍らにいるフランクの拳は震えていた。

そして陰鬱な様子のフランクは言葉を漏らす。

「俺が・・・俺がもつときちんとしてれば翔と竜也は・・・!!」

「だから、お前の責任じゃないって言ってるだろ？フランク」

エドは優しくフランクの肩にその手を添えた。

「そうですよ。それにまだ二人とも死んだって決まった訳じゃないですし」

アリスもフォローにはいる。しかし、フランクは浮かばれずにその場を去った。

「フランク・・・」

一同の周りを鉛のように重く冷たい空気が包み込んだ。

十

翔はシャワーを浴び終え出てきた。

捕虜の身分なのににシャワーを浴びるという前代未聞の行いを終えた翔は壁に体育座りで寄りかかり、彼を待っていたクララに声を掛けた。

「終わったぞ」

石鹸の香りがクララの鼻腔をくすぐった。

「はい。では、もどきましょう」

こうして、シャワー浴び終えた翔はクララと一緒に彼の独房へ戻った翔はふと思った事を口にした。

「そう言えばお前、日本語うまいけどどこで習ったの？」

数秒の沈黙。しかし、観念したかのように息を吐き、クララは答えた。

「私、昔日本に住んでたんです。」

「まじですか？」

訊いた途端に、翔は驚嘆の表情を浮かべた。

「はい。父は日本の外交官でした。戦争が激しくなって父は私と母をロシアへ逃がしてくれたんです」

大抵、敵国民は収容所に送られる。多分、彼女の父はそうさせないために危険を冒し二人をロシアへ逃がしたのであろう。

「実際、私の本名は山村クララなんです。ハリヤスキーは母の姓でして」

「なるほど・・・複雑だな」

「はい。簡単に言うと戦争に家族が引き裂かれたんです」

戦争に家族が引き裂かれた。この言葉は翔にもあながち当てはまる。

「俺もだ。クララ」

「え？」

「俺も戦争で家族を失った」

翔は誰かに家族の事を言うのはこれが初めてだった。

「俺が十二の時に母親が爆撃で死んで。六つの時に親父が日本海で戦死した」

翔の言った言葉はクララに鉛のように胸にのしかかった。

自分ではないが他の誰かが、彼の家族を殺した。その事実だけでも彼女に居たたまれ無さを感じさせた。

「俺の親父はパイロットだった」

遠くを見るような目で翔は語る。

「俺は親父に憧れてた。F-15に乗って空を自由に飛ぶ姿がカッコ良くてさ、俺もあなりたいって思った。それでパイロットを目指すことにしたんだ」

その言葉を聞いたクララは驚いた表情で言う。

「少尉のお父さんってまさか・・・風宮三郎大尉ですか？」

「良く知ってんな。そうだよ。その通りだ。日本海海戦でソ連機を20機近く撃墜した、風宮三郎だ」

「それであなたは・・・」

「そう。親父の背中を追ってパイロットになったんだ」

クララは首肯し、彼の言葉に耳を傾ける。

「俺は、あの背中に憧れてこの道を選んだ。別に国の為じゃない。家族の仇討ちとかでもない。ただ俺は・・・」

「空に、そして何より戦闘機にたまらなく魅せられただけなんだ」

翔は初めてだった。自分の事を素直にさらけだせたのが。これは竜也にも話せなかったことだ。

その理由はひとえにクララという存在だ。

彼女の優しい朗らかな雰囲気。彼女の笑顔が彼にそうさせたのであった。

クララは翔の腰掛けているベッドの上に座り、言った。

「もつと聞きたいです。少尉のお話」

「どんな話？」

「日本について」

「はい？お前、住んでた・・・」

突然の問いに少し動揺した翔だが無理もないと彼は理解した。

なぜならソ連の人民や資本主義国家の人民はどうあがいても分厚い鉄のカーテンを越すことなど出来ない。

「わかった。でも一つだけ条件がある」

「なんですか？」

目を輝かせ少女は言う。

「風宮少尉ってやめろ。翔って呼んでくれ」

「わかりました」

そして翔はクララを自分の傍らに座らせ語り始めた。故郷の美しい桜の事。友達とやっていたはずらの事。色々なことを。

楽しい事とはまるで魔法のようだ。時間と嫌な事を忘れさせてくれる。

とても敵同士の間に流れる空気ではない。でも敵同士であることは変わらない。

「また行きたいな・・・日本に」

ぼそりと彼女は呟く。

「どうして、戦争なんて」

彼女はうつむく。その横顔にある物は静かな悲しみだけだ。

翔の脳内ではいくつかの答えが浮かび上がる。

社会主義と資本主義。新資源プロトニウム。

だが出た結論は。

「知るかよ」

こんな答えしか出ない。出たところでどうといった所では無い。

「解るわけねえじゃん。俺ら下っ端に」

「ですよね」

クララの無理な笑顔。さっき見せていた心からの笑顔と比べれば一目瞭然だ。彼女の悲しい笑顔など。

「でも、私たち一応仲良くできてますよね？こんな風に、みんな出来たら・・・」

「出来ないから・・・出来ないから戦争なんて起きてるんだろ？」

翔は頭を垂らす。思い何かに引きずられるように。

理解し合つことが出来ないから、沢山の人が死んだ。

シンプルなことだ。

そんなシンプルな理由の殺戮の中に翔はその身を投じ人を殺めている。

今、この瞬間に翔はそれを知った。

「ですが・・・それを多くの人が出来れば戦争なんて・・・」

「そんなこと言つたて・・・」

翔の声は爆音に消された。

まばらに聞こえる爆発音。体に伝わる振動。

「・・・これって？翔君・・・」

「爆撃だ」

翔は思い出した。今日は連合艦隊の第七人工島攻略作戦が行われる

と。

二度と感じたくない振動が彼の体を突き抜ける。

翔の網膜の裏をほとばしる悪夢のフラッシュバック。火炎地獄と化した街、血塗れになった母の死相。すべてが蘇った。

「翔君!!」

クララの声が翔の意識を引き戻してくれた。翔は思考をリセットするために頭を横に強く振る。

「一緒に来て!!」

翔の手をクララはおもむろに引き、牢の外へと連れ出す。

人の濁流の濁流に逆らい、彼女と翔は階段を下り、ある薄暗い場所にたどり着いた。

クララはボタンを押し部屋に明かりを灯す。

「ここは？」

翔は辺りを見渡す。

あるのは無限にも広がる無骨な火砲の林だけ。

「武器庫です」

クララは背伸びをして柵から何かを取り出す。

「これ、お返しします」

その手にはホルスター、翔の装備品のM12が握られていた。

「どうしろって言うんだよ？これ持ってソ連のために戦えってか？」

「いえ・・・ただ護身用に返しただけです。それじゃ私は・・・」

そう言っただけで彼女はどこかへ走り去ろうとする。

「何処行くんだ!？」

「私の・・・私の成すべき事をしに行くだけです。翔君も、成すべき事をしてください・・・じゃ」

行ってしまった。

残された翔はしばし虚空をにらむ。

「・・・よし」

そして意を決して彼もまた走り出した。右も左も解らない戦場。そこに翔は己の身を投じる覚悟で走り出した。

自分のいるべき場所に帰るため、成すべき事を成すため。

MISSION 8 戦争の犠牲 (前書き)

今回は短めです

MISSION 8 戦争の犠牲

炎と血、そして悲鳴がある場所が地獄というのなら、俺は今そこにいる。

いつ見ても空爆の光景は嫌なものだ。

降りしきる爆弾の雨。大地に押し寄せる鉛の嵐。それらが作り出した人々の肉片。

まさに地獄。

裁きの炎は罪無き民を焼き尽くしている。

その光景を翔はただ啞然としてみていた。

四年前と同じ地獄、それは敵国でも同じように作られている。

止まっても何も起きないと思った翔は、歩き出すことにした。

つい数時間前までには日溜まりと子供たちの笑顔で満ちていた広場は死体と炎が代わりに陣取っている。

そんな一角。

「あ・・・」

翔は見つけた。男の子を。膝を突き何かにすがるその姿は何処か狂気が見え隠れしている。

翔は何かに惹かれその子の元へおぼつかない足取りで歩み寄る。

どこかでその光景を見たことがある。

「お前・・・」

翔はその男の子を知っていた。つい数時間前に自分の股間を蹴ってクララにしかられた男の子だった。

「何して・・・」

翔は言葉を詰まらす。

見てはいけないモノがそこにはあった。

それは穴だらけの肉の塊だった。もはや人間なのかどうなのかさえ判らないほどの損傷を負った肉の塊。

きつと彼の母親であろう。

翔の直感がそう彼に囁く。

「離れろ！！離れないと死ぬぞ！！」

足を早めようと踏ん張った刹那だった。

激しい閃光と共に発生した衝撃波が翔をおもちゃの人形のように吹き飛ばす。

爆弾が近くに着弾したのであった。

受け身もとれず背中から叩きつけられた翔の肺は酸素を絞り出す。猛烈な激痛が体を突き抜けた。

翔は何とか立ち上がり男の子の元へ駆け寄った。

「あ・・・」

血溜まりに浮かぶ小さな体。爆弾でずたずたにされた矮躯はさっきの男の子のモノだと翔は理解した。

喉笛からはひゅっひゅっとうと苦しそうな音を立てている。

「大丈夫か!？」

翔は駆け寄る。彼は敵国の子、しかし……この子に罪は無い。

「いたい・・・いたいよ・・・」

パイロットならロシア語を少しはかじる。その子の言うことは翔は理解できる。

「我慢してくれ・・・」

さがるような気持ちで翔は男の子の服の袖を千切り、止血しようとする。

「いたい・・・ころして・・・」

「何言つてやがる！？男だろ！？我慢し・・・」

言葉が詰まる。

母親は死に、自身の体はズタズタ。この状況なら死を望むのが常人の思考なのであろう。

懇願する瞳。そして、彼の手元には自前の拳銃がある。

殺すのが情けなのか？生かすのが情けなのか？

迷って迷って迷った。

そして・・・

「なあ・・・良いのか？死んで？」

「う・・・ん」

「生きてりゃ良いことあるぜ？」

「もう・・・いいよ。うって」

翔は拳銃のセーフティを外した。スライドを操作して、照準を彼の小さな頭に合わせる。

サイト越しに移る翔の目には光る何かがこぼれ落ちていた。

そして指に力を入れた。

乾いた銃声。

重い衝撃。

引き金を引くだけの単純作業だった。しかしそれだけで人の命を奪えてしまう。

「簡単じゃないか……」

翔は自然と笑みがこぼれた。笑えないのに何故か笑えてくる。

「こんな事って……こんな事って……あつて良いのかよ？」

翔は誰かに問う。

「なあ……誰か答えてくれよ？なあ！？」

正義の為、自由の為の戦争。聞こえは良いが戦争の本質は変わらない。

これが戦争。無慈悲な殺戮の場。

少年はその重みをこの場で知った。

「何がパイロットだよ……畜生！！」

人工の大地を拳で翔は力一杯殴りつける。その痛みが自分という存在をこの地獄の中で保たせてくれた。

烈火の中で呆然と空を見る翔。遙かな空では死のラッパを鳴らす天

使達の群が統制のとれたV字で飛んでいた。

それが今は忌々しくて仕方ない。

そして彼は叫んだ。

「やめろおおおおおおおおおおおおお」

十

4月17日 午前10：47分

数時間もしたら俺は海兵隊に拾われた。

それでビーチでヘリに乗り空母へ帰った。

俺の短い捕虜の期間は終わった。大きな傷を残して。

風宮翔はする事もなく、ベッドの上で身を横にしていた。

思考もなく見つめる蛍光灯の明かり。それは、彼の一種の精神安定剤の役を担ってくれた。

この手で人を殺めた事。あの地獄の事、それらの悪夢を網膜に呼び起こさないために彼は何も考えずに明かりをぼんやりと見つめていた。

「翔!!」

ルームメイトのフランクが慌ただしい様子で部屋に入ってきた。

「んだよ？」

「竜也が・・・とにかく！！急げ！！」

竜也。その単語を聞いた瞬間、翔は訳の分からない力が沸き上がり、ベッドから文字通り飛び降りてフランクの後を追う。

竜也が帰ってきた。

白い廊下を翔は全速力で走った。水兵にぶつかっても構わず走り続けた。

シックベイについた翔は手近にいた彼の友人、黒く長い髪を持つ絵に描いたような大和撫子の秋月亜衣に問う。

「竜也は・・・どこだ？」

「え・・・あ・・・その・・・」

そのまま彼女は沈黙した。普段から大人しく控えめな亜衣だが、今回は勝手が違った。その声色はひどく悲しみを帯びていた。

「竜也は？亜衣？」

「竜也君は・・・あっちにいるよ・・・」

うれしい涙か翔には判らないが、彼女は涙を流していた。指さした先にあるのは個室だった。翔はその個室に向け足を運ぶ。その途中、翔の背筋に嫌な予感が走る。

そして到着。彼は扉を開けた。

「翔・・・」

そこには4日ぶりに会うパイロットスーツを着たショートヘアの少女、吉田光とベッドの上に横たわる誰かがいる。

その誰かの顔には白い正方形の布が乗っていた。

「光？これってどういう事だ？」

まだ状況のつかめない翔は光に状況の説明を要求する。

だが、彼女は何も言わない。

言葉の代わりに彼女は翔の胸に飛び込んできた。翔は彼女を受け止める術も知らずに、ただ、ただ啞然とするばかりだった。

彼女の160センチの身長は翔の胸元ほどしか届かずにいる。そして、翔はパイロットスーツ越しに温かい何かを感じた。

涙だった。

「な・・・光？これって何だ？」

漏れる嗚咽。彼女は泣いていた。

「泣いても何も解ないだろ？話して・・・くれよ・・・話せよ！」

自然と翔は声を上げた。そして、彼女は翔から離れ言う。

「宮島・・・竜也少尉が発見されました・・・遺体で・・・」

翔は理解できなかった。

つい一昨日まで普通に話していた竜也が死んだなどと、言われても実感など湧かない。

どうせドッキリでも企んでんだろ？くらいの軽い気持ちで翔はそのベッドに横たわる誰かの純白の布を取った。

それは竜也だった。

げらげらと笑い、「ドッキリ大成功」などと言って翔をからかくてくれっと思っていた。

しかし、布の下にいた彼の顔には血色は無く、生氣もなかった。

「これって、まじか？」

翔は毛布の下にある彼の手を握ってやる。

冷たかった。

「は・・・」

人は死ぬと冷たくなる。翔はそれを4年前に彼の母親が教えてくれた。その身をもってして。

死んだ。竜也が。

約2年間、彼と共に空を飛び、危険を乗り越えた相棒が冷たくなつて眠っている。

「ごめんなさい・・・ごめんなさい！！私がもつと・・・もつと早く見つけてれば！！」

泣いて謝る光。誰に謝っているのであろう？そんな事を思いつつ、光を翔は無気力な目で見ていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5181j/>

少年と空 - EAGLE KNIGHT -

2012年1月8日18時49分発行